

二日後。

私は美佐子からもらった名刺のカレンダーで彼女が出勤している日と時間であることを確かめてから、彼女の家で電話をかける。

番号は同じ市内である事を示していた。

数回の呼出し音の後、美佐子が電話にでる。私は一瞬戸惑う。

(居たのか)

「あつ、この前店で電話番号を……」

「うん、声でわかったわ。……電話ありがと、かけて来てくれて……」

「今日、店は……?」

「……うん、あの店、辞めちゃったの……勤める理由がなくなったから……」

「そう……、明日でも逢えないかな?」

「うん。今日、今からでもいいわよ……」

「……やっぱり明日がいいな、店の近くの(エコー)で、場所解るね? 八時頃に」

「うん、解る。喫茶店ね。じゃ夜八時に。」

「じゃ……」

「うん……」

電話を切りかけた時、美佐子の声が再び受話器から聞える。

「確かめるため……?」

ちよつとからかっているような声だ。

「うん?」

「この時間にかけてきたのは、私が一人暮しだつてのを確かめる為?」

「……そうだ」

「うふふつ……正直ね。安心して、変な心配はしなくていいわ。私は一人」

「そうか……」

私は電話を切る。

何故か奇妙な気分の高揚を感じていた。

翌日。

(エコー)のテーブルを挟んだ私の正面で美佐子が話している。

「この店の名前(エコー)ってナルシスに恋をしたニンフの事かしら、それとも単に……」

「多分、そうじゃないのかな、壁に掛けてあるレリーフが女の妖精だ。それにあのボードの上の置物、スイセンじゃないか」

「話、知っているのね？」

「少し興味があつてね。でも君はいつもそうして男の事を確かめるのか？ 海外の神話を知っている事ぐらいじゃなんとも言えないと思うがね」

「……そうね、確かに。でもある種の男は見分けられるわ」

「正直だな」

「あなたも昨日の電話で正直だったわ」

美佐子がそう言いながら微笑む。それは私が初めて見る、彼女の本物の微笑みだった。

その間も彼女の視線は、この前の時と同じように私を見詰め、離れる事はない。

私はテーブルに身を乗り出し、彼女の耳元に囁く。

「じゃ、もっと正直になろうか」

彼女のうなじはこの前のものとは違った香水の匂いがした。

「出よう、ホテルで君を抱いてやる」

美佐子が首を傾げ、私の首筋を舐めた。



ホテルの部屋に入るとすぐに私は美佐子の唇を奪う。

舌を軽く彼女の歯に押し当てると、微かに(エコー)で飲んだミルクテイの味がした。

彼女の口が開く。舌が絡まった。

美佐子が私の背中に腕を回してくる。強く組み合わせられ、私を締付ける。小さめとは言え、やはりはつきりと乳房の感触が伝わってくる。

互いの腰が密着し、私は勃起を覚える。わざとその昂ぶりを彼女の腰に押し付けると彼女も又、それを押し付け、応じてくる。

どちらからともなく唇を離す。美佐子が微笑む。

「口紅がいっぱい付いちやったわ……」

再び腕に力が入り私を抱しめ、彼女の顔が再び近づいてくる。美佐子は私の口の回りについた掠れた紅を舐め取っていく。

「ファーストキスにしちゃ強烈だったな」

私かぶざけて言うと、彼女の表情が少しだけ真面目なものになる。

「ウフフツ……そうだったわね……。そう、私ね、本当のファーストキスから三日後だったわ、男の人に抱かれたの、もちろん初めてだった」

「急に面白い事を言うな……。でも早かったんだな、彼氏が強引だったとか？」

「いいえ、多分違うわ……。私から迫ったようなものね。キスされた日から私チヨット変になったの、日に何度も自分を慰めた、学校のトイレなんかでも……。だから……」

私は再度、彼女と唇を重ねる。

ソファアに座った美佐子のブラウスのボタンを外す。フロントホックの留金を外しブラジャーを開く。両手でゆつくりと両の乳房を揉み上げると。乳首がその形をはつきりとさせ、彼女の吐く息がある種の艶を帯びはじめ。

「……小さいでしょ……。恥ずかしいわ……」

「いや、ちょうど良いよ。あまり大きすぎるのは好きじゃない」

「本当に……？」

「本当だ」

美佐子が微笑む。

私は彼女の乳首を親指と人差指でつまみ上げ、やや力を入れてこね回す。指の間で乳首がしこり、息が荒くなっていく。

私は愛撫する手を止めずに、彼女に聞く。

「セックスが好きなのか？」

美佐子が小声で答える。吹きかかる息が熱い。

「……ええ、ええ。好き」

「どこを感じるんだ？」

「みんな、みんな感じるわ」

「どこか言えよ、そこを舐めてやるから」

「お乳も……。前も後ろも……。みんな、みんな感じる……。凄く」

「今でも自分でするのか？」

「する、するわ、休みの時なんか」

「今日はどうだったんだ？」

「したわ、お昼に貴方の事考えて……」

「尻もいじったのか？」

「……指を入れたわ」

私は指の力を、つまむと言うより触ると言う程度に緩める。

美佐子が溜め息のような息をつく。その瞳は潤んでいるような光を湛えている。

「今、濡れている？」

「うん……。そう思う」

「下だけ脱いで、見せてよ」

美佐子がソファから立ち上がり、スカートの中に入れた手で下着を下ろしていく。

脱ぎ終えた時、隠そうとするのを私は取り上げる。股の、布が二重になった部分が湿っていた。

そして微かな香水の匂い。

美佐子がスカートを床に落とす。寄り合わされた股間からもっと濃い香水とそして雌の匂いが漂い出してくる。

「自分でやって見せてくれ」

私が囁く。

美佐子が股を開いた格好でソファに両膝をつくと、股間の秘肉の合せ目が割れ、ピンクがかったその奥の部分が見えた。既に滲んでいるぬめり明るい電灯の光りを反射する。

彼女は両手を肉襞の上部に添え、さらに開く。内側の繊細な粘膜を押し上げるようにして肉の尖りが顔を出し、尿道と、そしてわずかに開いた肉穴が窺えた。

「見て……」

彼女が昂ぶった声で囁きながら、右手の中指で円を描くように尖りを刺激しはじめる。既に濡れている肉穴の奥から更にぬめりが滲み出し、肉襞を伝い落ち、そこを淫らに濡れ光らせていく。

美佐子は、私の目を見つめながら憑かれた者のように手を動かす。
息が乱れる。

「ねえ、ねえ、お尻触って良い？」

彼女が途切れがちな声で聞く。

「いいよ、触って。そのかわり……」

私は立ち上がり、スポンのチャックを下ろす。昂ぶったものを取り出し彼女の前に突き出す。

美佐子が手を忙しなく動かしながら姿勢を変える。ソファに深く座り、脚を大きく開き腰を浮かす。右手が秘部を刺激し、後ろから回した左手がその向こうの窄まりをいじる。

私が自分の昂ぶったものを握り、彼女の唇に押し当てると彼女は身を乗り出すようにして深くくわえ込もうとする。

私は腰を引き、その唇に亀頭の部分だけを含ませ、なおも前に進もうとする彼女の頭を押さえる。

途端に唇と舌が亀頭とその先端の窪みを激しく舐めはじめた。鋭い快感が走り、思わず私は小さくうめき上げる。

美佐子が唇と舌だけを懸命に動かし、私の剛直を吸い上げ、舌尖を先端の窪みにこじ入れ愛撫する。

その下では、彼女の指と秘部がぬめる音を立てはじめた。私は、彼女の唇かせ外に出ている剛直の竿の部分右手で擦り上げる。

快感が増す。

私は、私の剛直を吸い、窄まった彼女の頬に左手を添え、彼女と視線を合わす。私を見詰めるその瞳が快楽を助長した。

「出す、よ」

美佐子が肯き、彼女の指の立てる音が激しくなった。

私は彼女の口の中に白濁を放つ。

熱い飛沫を受け止める時にだけその唇の動きが止まった。

彼女が強く剛直を吸い上げ、その快感に私は声を漏らす。

美佐子の喉が低く鳴った。



私はぬるめの湯を張った湯船の中に身体を伸ばして座っている。

先程の射精の余韻がまだ下腹部にわだかまっていた。けして不快なものではないが又、充実感を覚えるようなものでもない。やはり本来のセックスによらない射精であった所為だろうか、そうマスターベーションの時のように。

バスルームのドアが開き美佐子が入ってくる。一瞬視線が合い彼女が逸らす。やはり先程の痴態が恥ずかしいのか……?。

私はわざと陽気に声をかける

「口、ちゃんと濯いできたかい」

「ばか……」

小声で答える。だが微笑みは蘇った。

湯があふれだし、美佐子が湯に入ってくる。私は湯船の壁にもたれかかるように身体を起し、彼女の背中を抱く。

美佐子が深い息をつき、私の肩に頭をもたれかけてくる。

二人の目が合う。彼女が微笑み、瞳を閉じる。

バスルームを沈黙が支配する。都会に住むかぎり逃れられない外からの雑音と、湯が湯船から

流れ落ちる微かな音だけが私の耳にとどく。彼女が目を閉じたまま体重を私にあずけかけてくる。先に口を開いたのは美佐子だった。

「お風呂、本当にぬるいのが好きなのね」

その瞼はまだ閉じたままだ。

「汗かきだからね、俺」

「ウフフツ、知ってるわ」

瞼が開く。

私は右手を前にまわし、美佐子の乳首を触る。柔らかい。

「何故、馴染みの客でもなかった俺に、家の電話を教えたんだ？」

私は美佐子の乳首に触れる。しかしそれは先程の時のようなセックスを意識させるようなものではない。

彼女の乳首は柔らかなままだった。

美佐子がわずかに間を置いてから答えた。

「貴方が好きになったから……、かも……」

「好き……か、少なくとも（愛）なんて言葉よりはましだな」

「（愛）ね、私その意味がよく解らない。不思議な言葉……凄く美しく聞える時もあるし、不潔にも聞える時もあるわ……。幾く通りにも、どんな意味にも、使える言葉。」

使う人によって違う意味付けが出来る言葉……。奇妙な言葉……」

「詩人だな」

「そう、女は皆、詩人」

「男もそうだよ」

私は湯船から立ち上がる。

美佐子が私に声をかける。

「身体、洗ってあげようか？」

「いいよ、自分で洗うから」

「遠慮？」

「いや、自分で洗いたいんだ、もう俺は君の客じゃないんだから」

「……やさしいのね」

「それだけが取柄でね」

美佐子が微笑む。

「それだけが取柄じゃないわよ」

私はソファ―に座り備え付けの冷蔵庫から取り出したコーラを飲む、グラスに注ぎ直した時、

美佐子がバスルームから現れる。私と同様、備品のバスローブを羽織っていた。私の横に座る。

「コーラ、飲むかい？」

「飲ませて……」

私は一口含むと美佐子にくちづけける。コーラを彼女の口に流しこむと、わずかに唇の端からこぼれたものがローブに流れ落ちる。彼女の喉の動きが私の唇に伝わって来た。

舌が絡み合おうとするが、すぐにお互いが唇を外す。

「貴方の舌、冷たくて甘い……」

「コーラの所為だろ」

私はローブを着けたままの美佐子をベッドに寝かせる。

こういったホテルに似合のベッドだった。円形で大きく、枕許には照明やBGMをコントロール出来るスイッチ類が並んでいる。

「さっきの一人でやった時の後はじ末がちゃんと出来てるか調べてやろうか」

私はふざけて言う。

「だめ、さっきのキスでまた、汚れちゃったわ」

美佐子が調子を合わせる。だがその声には隠しようのない昂ぶりが滲みだしはじめていた。

私は勢いよく彼女のローブの紐を解き、開く。湯で火照り、ピンクがかった肌に飾られた黒々とした陰毛が私の目を捉える。

私は美佐子の乳首を口に含む。微かにボディシャンプーが香った。

軽く前歯で挟みこみながら舌尖でその先端を刺激すると、すぐに乳首が起立しはじめた。

「……う……ん……」

彼女の漏らした甘い声が、耳を刺激する。

唾液に濡れた乳首と乳房を手のひらで愛撫しながら、唇をもう片方の乳首に移す。

手の中の、中指と人差指の間に挟みこんだ乳首は起立したままだ。

彼女の乳房を堪能した私は、首筋に舌をはわせて行く。なめらかな肌とその熱さが舌に心地好い。

閉じた瞼に軽く唇を触れさせ、耳の後ろを舌で愛撫する。ピクリと痙攣にも似た動きが彼女の身体を走り、わずかに開いた唇から舌尖が覗く。甘い息がもれる。

私はわざと誇張した昂ぶりの息を彼女の耳穴に吹きこむ。

美佐子の頭が急に動き、開いた目が私と視線を合わせる。

「キス、して……」

唇を合せると、彼女の舌が私の口の中で決して優しいとは言えない動きをみせた。

右手を彼女の下腹部に伸ばす。ざらついた陰毛の感触を撫ぜ回しながら、中指をもつと奥に進めていくと、浴びたシャワーの為だけではない火照った太股が、私の腰に絡み付いてきた。

右手をさらに陰毛の奥に進めると、先に肌とは違った感触の粘膜が触れる。

彼女の秘肉の二つの唇の感触を私は楽しむ。浅く挿し入れた指先を上に向かってすべらせていくと、上端の尖りはまだその存在を主張しはじめたばかりだった。そのまま指をそつと曲げると熱い湿りに触れる。指を内に潜りこませた時、美佐子が重い息を吐いた。肉穴が蠢き、指を締め付けてくる。

私は彼女をベッドにいざなう。身体をずらし股間に寄せた口で陰毛を数本、歯に捉えて引っ張り上げる。

「!.....」

彼女が声にならない（声）を上げた。

口の中に残った短い陰毛を手で拭い取った後、私は大胆に彼女の脚を開く、多分実際のもではない熱気と、そして香水と交じり合った女の匂いがした。

私はわざと秘部を避け、彼女太股の付根あたりに舌をはわせていく。

舌が薄い汗の味を感じとった。

手を伸ばし乳房に触れる。柔らかく歪む乳房の感触の中で乳首だけが固い。

私は舌先を彼女の中に差し入れ、肉壁をかき分けるようにして舐め上げる。滲みだしたたりと私の唾液が、持ち上がりはじめている肉の芽を濡らす。

唇でその尖りを挟みこみ、舌でその包皮を押し下げるようにして剥く。内部の繊細な感触を味わいながら、舌を絡めつかせ愛撫すると、美佐子が声を上げ始める。

肉穴からあふれだしたりがその下の小さな窄まりにとどく。

彼女の太股が私の顔を締付けてくる。唇を押し付け舌を深く挿入と、中は濃い粘液でぬめり、その肉壁の震さえ感じ取れない。

私が身を起すと、それに応じるかのように、彼女も肘を立てて上半身を起す。

「私にもさせて……」

私は彼女を優しくベッドに押しつける。

「まだ駄目だ」

私は、美佐子の脚を広げ、シートに垂れ落ちる程に濡れた肉壁を片手で押し広げながら、手を添えた剛直を挿入する。

「ああ……!」

彼女が顎を上げ、大きく開いた唇から苦痛の時にも似た声が漏れる。添えていた手を放し、私は美佐子に覆いかぶさっていく。剛直が奥に進み、互いの陰毛が擦り合さった。

両腕を背中に回すと、彼女の太股が立った腰を締め付けてきた。更に挿入が深くなった。

二、三度のタイミングのずれの後、私たちの動きが協調を見せはじめる。私が腰を押し付ける度に、彼女の唇からは息と声が押し出されるように漏れる。

美佐子が更に脚を大きく差し上げると、股間が更に密着する。

美佐子が荒い息と区別のつかない声を上げはじめる。その彼女の息は、ジャコウに似た香りでした。

私の胸の下の、彼女の身体が一瞬の間だけ緊張する。その動きはまるで全身の筋肉が一斉に震えたかのように彼女の身体に伝播していく。

少しだけ私の腰を締め付けている彼女の太股の力が抜ける。

私は腰の動きを緩やかにして、彼女の手を指と絡め合せながら握る。美佐子の目が開く。その瞳には焦点がない。浅く開いた唇からは、まだ私の動きに呼応するように息が漏れつつけている。

その瞳が一瞬私の目に焦点を合す、手が強く握り返され、私の腰を挟む太股に力が戻った。

私は動きを早める。

美佐子が途切れなく声を上げはじめる。

立てられ、膝で曲げられた脚が上に乗っすぐ上に差し上げられる。

私の肌に密着した彼女の汗ばむ肌の蠢き。全身を快楽に支配され、その一欠片さえ逃さぬように貪る女の顔。固く閉じられた瞳。背中で強く何かを求めるように曲げられる指。爪の感触。

私は射精が近づくのを意識する。

彼女も又、がその（内側）で私の変化を感じ取ったのか、腰を突き上げ、激しく振りはじめる。

「ちようだい。お願い。私の中に出して！」

荒い息を押し通すように、美佐子のはつきりと言った。

私は腕を立て、密着していた上半身を浮かせる。わずかだけ腰の密着が浅くなり、立てられていた彼女の脚が、まるで逃がすまいと言うかのように再び私の腰を締付けてく。

私はそれを振り切ように激しく腰を振る。

ベッドが軋む。

「ああああ……！」

その瞬間が至近にまで来た時、美佐子はベッドの上で身体を反り返す。私を深く受け入れている肉穴が痙攣のように激しく早い調子で蠢き、私をきつく締付ける。筋肉が硬直し、揺れる乳房の上に肋骨が浮び上がる。

美佐子が叫ぶ。

「いつ、一緒に、いっしょに！」

私はその一瞬後に訪れた放出の快感に低い声を上げる。

剛直の中を熱いぬめりが通過し、彼女の中に発せられたのが、はっきりと伝わってきた。

私は射精の余韻に浸りながら、既に硬直を解きはじめている美佐子の乳首を啜える。そんな私の頬を彼女の満ち足りた甘い息が撫でていく。私は乳首を濡らす濃い汗の味を感じながら、目を閉じる。

休日である。

いつも通りに私はベッドの中で惰眠を貪っている。時間は既に昼に近い。一人暮しの気軽さだろうか、最近は一日の休みの内土曜日は殆ど午前中にベッドを出ることはない。悪友である会社の同僚に言わせると「もう歳だ」そうだ。

私は上半身を起す。

ベッドサイドのテーブルには、昨晚飲んだコーラの空缶が放置されている。私は自宅では酒類を飲む事はまずない。今の会社に入るまでのフリーのプログラマーだった頃の習慣が身につけてしまっているのだ。あの頃私の自宅は（職場）だったのだ。

起き上がった私はコーラの空缶を掴み、握り潰す。薄いアルミ製の缶はすぐにひしゃげ、角が裂ける。その裂け目から底に残っていたわずかなコーラが手にしたり落ちたり落ちた。

舐め取る。

甘い。何故か美佐子の事を思い出す。

（貴方の舌、冷たくて甘い……）。

あれから三日経っていた。

私は潰した空缶を屑人に投こみ、再びベッドに横たわる。やはり美佐子の事が脳裏から消えない。

私はふと彼女の事を殆ど何も知らない事に気付く。知っている事と言えば、年齢。

私より一つ下だったか。店に勤めだして二ヶ月程。その前は何をやってたんだ、お決りのピンクサロンのホステスか何かか？。店を辞めた、（勤めている理由がなくなったから……）。理由がなくなつた？。じゃ、今は何をしてるんだ、別の店にでも移つたのか？

そして私は気付く。そう、彼女も又私の事は殆ど何も知らないのだ。

私は何故か納得したような気持ちを抱く。

再び「惰眠」が誘惑をはじめ。

美佐子から電話がかかってきたのは、それから私が二時間ばかり眠った一時頃だった。

「こんにちは」

「こちらは（おはよう）だな。寝てたんだ」

「そうなの、起したのね。ゴメン」

「いや、君の声が聞かれて嬉しいよ」

「フフツ……うまいのね。ねエ、今日予定あるの？」

「別にないよ、逢おうか？」

「うん、逢いたいわ。場所はこの前の（エコー）でいい？」

私は承知の答えをしようとして、一瞬考える。違った答えが私の口から出る。

「……いや、良かったら君の家に行きたいな」

「えっ……」

「駄目か？」

「……駄目じゃないわ、でも……」

電話の向こうの美佐子のためらいが伝わってくる。

「わかった、（エコー）で……」

諦めかけた私の声を、彼女が遮った。

「ううん、いいわ。私の家に来て……、場所は……」

私は彼女の家の場所を聞いた後、電話を切る。彼女の家は私の自宅から私鉄で三十分程の駅にある賃貸マンションだった。

私はシャワーを浴びにバスルームに向かう。

以下、次回へ